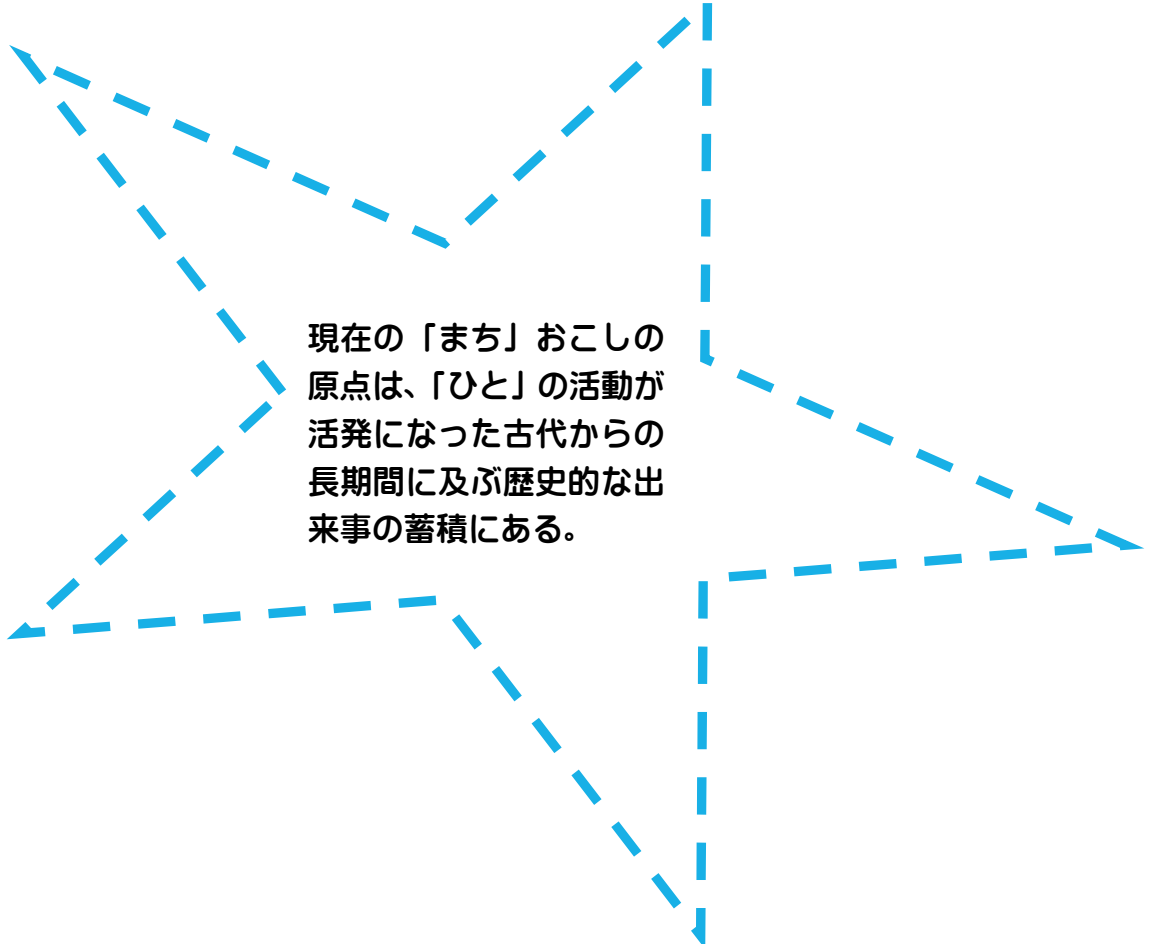


**筑紫国（福岡県）周辺の古代城跡からみる歴史
—「まち」おこしとしての財産を活かすため—**

内山 敏典



現在の「まち」おこしの
原点は、「ひと」の活動が
活発になった古代からの
長期間に及ぶ歴史的な出
来事の蓄積にある。

目 次

1. はじめに	-----	1
2. 朝倉地方の遺構等	-----	3
3. 大野城跡および水城跡	-----	11
4. 天智天皇と基肄城	-----	23
5. 鞠智城跡と菊池神社	-----	29
6. 中間市の斉明天皇に関する遺構等	-----	37
7. 筑紫の磐井	-----	43
8. おわりに	-----	49
参考文献	-----	50
著者紹介	-----	51

1. はじめに

現在の地域経済社会での文化や伝統は長期間に及ぶ歴史的な出来事の蓄積から成り立っている。本書は筑紫国（つくしのくに：豊後国の一部を除く福岡県）周辺の“動かすことができない遺跡”すなわち遺構を取り上げ、そこから現在の地域社会にどのように役立てられるかを考えていきたい。

現在の福岡県は、遠い過去において、刀伊の入寇（といのにゆうこう：刀伊は朝鮮東北部から満州一帯にかけて住んでいた女真族で、1019（寛仁3）年3月末に対馬と壱岐で略奪し、4月7日に怡土、志摩および早良を、8日には残ノ島に、9日には博多に上陸して警固所を襲撃したが、地方豪族武士によって撃退されたとのことであった^{注1)}）、元寇（文永・弘安の役：蒙古襲来：鎌倉時代中期に、当時モンゴル高原及び中国大陸を中心領域として東アジアと北アジアを支配していたモンゴル帝国（元朝）と高麗によって2度にわたり行われた対日本侵攻の呼称である。1度目を文永の役（ぶんえいのえき）といい、1274年10月5日に対馬、20日に今津、百道松原、箱崎方面まで上陸してきている。これに対し九州の御家人が対抗していたが水城まで退却させられたとのことであった。この時は台風で元軍も戦死者とともに船が沈むということでの犠牲者も多く引き上げていったとのことである^{注2)}。2度目を弘安の役（こうあんのえき）であり、元連合軍は1281年5月3日に合浦（がっぽ）を出発し、対馬と壱岐に侵攻、6月5日に志賀島と能古島に着き、博多湾周辺の海陸での戦いを繰り返していた。このときは文永の役の後に築いた石築地（防塁）で内陸部への進行を食い止め、また7月1日の台風に遭い退散している^{注3)}。とくに、元寇については多くの遺構や史料が残っている。

これらの侵入のうち刀伊の入寇からさかのぼること、400有余年前唐・新羅連合軍の侵入に備えた遺構（整備されたものもあるが）がいまだ多く残っている。この時代の時期はわが国（倭国）で最初の中央集権国家の律令時代でもあった^{注4)}。この時代の筑前周辺の遺構を列挙すれば、斉明天皇・天智天皇（中大兄皇子）の朝倉橘広庭宮と木の丸殿、斉明天皇行宮の御館山、大野城、水城、天智天皇の基肆城および鞠智城などがある。

これらの遺構は、645年の乙巳の変（いっしのへん）^{注5)}後に、大臣として天皇以上に権勢をふるっていた蘇我蝦夷[そがえみし：？～645年：628年推古天皇の死後、皇位継承問題で有力候補であった厩戸皇子（うまやどのみこ：聖徳太子）の子山背大兄王（やましのおおえのおう）の擁立派をおさえて田村皇子（たむらのおうじ：舒明天皇）を即位させた^{注6)}]と息子の入鹿（いるが）からの権力を取り戻した後の国づくりが急務であった。しかし、当時百済の救援のために兵を派遣していたが^{注7)}、663年の白村江の戦いで倭国（大和政権）・百済連合軍が唐・新羅の連合軍に敗れたために、唐・新羅連合軍からの日本列島への侵攻に備える西日本各地に築いた城として、現在の福岡県周辺では朝鮮式山城^{注8)}といわれている大野城、水城、基肆城および鞠智城がある。

中大兄皇子[なかのおおえのおうじ：天智天皇（てんちてんのう：614(推古22)～671(天

智 10) 年、舒明天皇の第 1 皇子で母は皇極天皇・斉明天皇、大化の新政を断行し、律令体制の基礎を築いた天皇^{注 9)}は「乙巳の変」の直後に即位した孝徳天皇が「改新の詔（かいしんのみことのり）」を発令し、公地公民制（豪族が所有していた土や人も天皇が支配する）、国郡制度（全国を国に分け、国をいくつかの郡に分けるといふ地方行政組織を定め、朝廷からは国司が派遣され政治を執ること）、班田収授法（6 年に一度戸籍を作り、その戸籍に従って土地を公民に分け与えるが、亡くなったら国に返還する）および租庸調の税制（公民は税を負担義務があるという統一租税）によって、天智天皇とともに律令国家の礎を築いている。これらのような全国規模の一連の改革の影響とともに、福岡県周辺では一時的ではあるが斉明天皇（さいめいてんのう）と中大兄皇子（なかのおおえのおうじ）が朝倉橘広庭宮で政権を執り行っている。

上記のような遺構等は『日本書紀』および『古事記』からの出典に多くみられる。両者とも天智天皇の弟であった天武天皇が作らせている。前者は国の歴史書であり、後者は天皇家の私的な歴史書と言われている^{注 10)}。本冊子はこれらの中に記載されている内容が実際に存在しているかあるいは存在していたかを確認し、現在の地域文化の蓄積を考えたい。

注 1) 参考文献[4]151 頁から引用。

注 2) 参考文献[4]73 頁から引用。

注 3) 参考文献[4]73～74 頁から引用。

注 4) 古代の律令時代は飛鳥、大津京、奈良および京都などが中央政府の所在地であり、九州では上位出先機関が大宰府であった。また近代の中央集権国家は明治維新期に中央政府は東京であった。

注 5) 「大化の改新」は「乙巳の変」から始まる一連の国政（政治）改革であり、中大兄皇子は軽皇子（幸徳天皇）を即位させて自らは実権を握り人事刷新をしている。孝徳天皇は「改新の詔」を発令する。

注 6) 参考文献[14]の 708 頁から引用。

注 7) 当時の朝鮮半島は 3 世紀から 6 世紀中頃にかけて高句麗、新羅、百濟、加羅諸国（任那（みまな）が倭国の出先機関として存在）の国があった。

注 8) 古代山城のうち、国書に記載されたものを朝鮮式山城、記載されていないものを神籠石系山城といい、古代式山城はこれ以外にも中国式山城が怡土城跡[いとじょうあと：福岡県糸島市高祖：築城主は吉備真備（きびのまきび）のち佐伯今毛人（さえきのいまえみし）] 歴史公園鞠智城・温故創生館ホームページ www.kofunkan.pref.kumamoto.jp および糸島市のホームページ www.city.itoshima.lg.jp のサイトマップより。

注 9) 参考文献[14]の 837～838 頁から引用。

注 10) 詳細は、<https://nihonshinwa.com/archives/763> を参照。

朝倉地方の遺構等

2. 朝倉地方の遺構等

朝倉地方の斉明天皇[皇極天皇（こうぎょくてんのう）：594（推古 2）年～667（斉明 7）年、はじめ高向王（たかむこのおうきみ）に嫁ぎ漢皇子（あやのおおきみ）を生んだが、後に舒明天皇の皇后となり、中大兄皇子（天智天皇）、孝徳天皇の皇后である間人皇女（はしひとのひめみこ）、大海人皇子（おおあまのおうじ：天武天皇）を生む。孝徳天皇の没後、再び斉明天皇となる。^{注11}]は、白村江の戦い後に百済復興の戦いに備えるために、難波などを経て娜大津（なのおおつ：現在の博多港）より磐瀬行宮（いわせかりみや：現在の福岡市三宅の地）に入り、661（斉明天皇 6）年 5 月その後朝倉橘広庭宮（あさくらのたちばなのひろにわのみや）に遷り営んだ。このとき天皇は朝倉社（あさくらのやしろ）の木を伐りはらって、橘広庭宮を造ったので雷神が怒って壊したとの記述がある。また宮殿内に鬼火が現れ、大舎人（おおとねり：律令制の下級職員、行幸などの行列を供にする人）や近侍（主君の傍に仕える人）の人々に、病んで死ぬものが多かった。さらに天皇は 7 月 24 日に橘広庭宮で崩御されたとのことであつた^{注12}。中大兄皇子は木の丸殿（きのまるどの）に殯（もがり）をして仮埋葬したとのことである。

また、朝倉の斉明天皇関連の遺構は、貝原益軒の『筑前國讀風土記』^{注13}、青柳種信『筑前國續風土記拾遺 中巻』^{注14}、加藤一純・鷹取周成『筑前國續風土記付録 上巻』^{注15} および奥村玉蘭『筑前名所図会』^{注16} の江戸時代の学者の記述からも朝倉に斉明天皇および中大兄皇子の遺構を裏付けることができる。

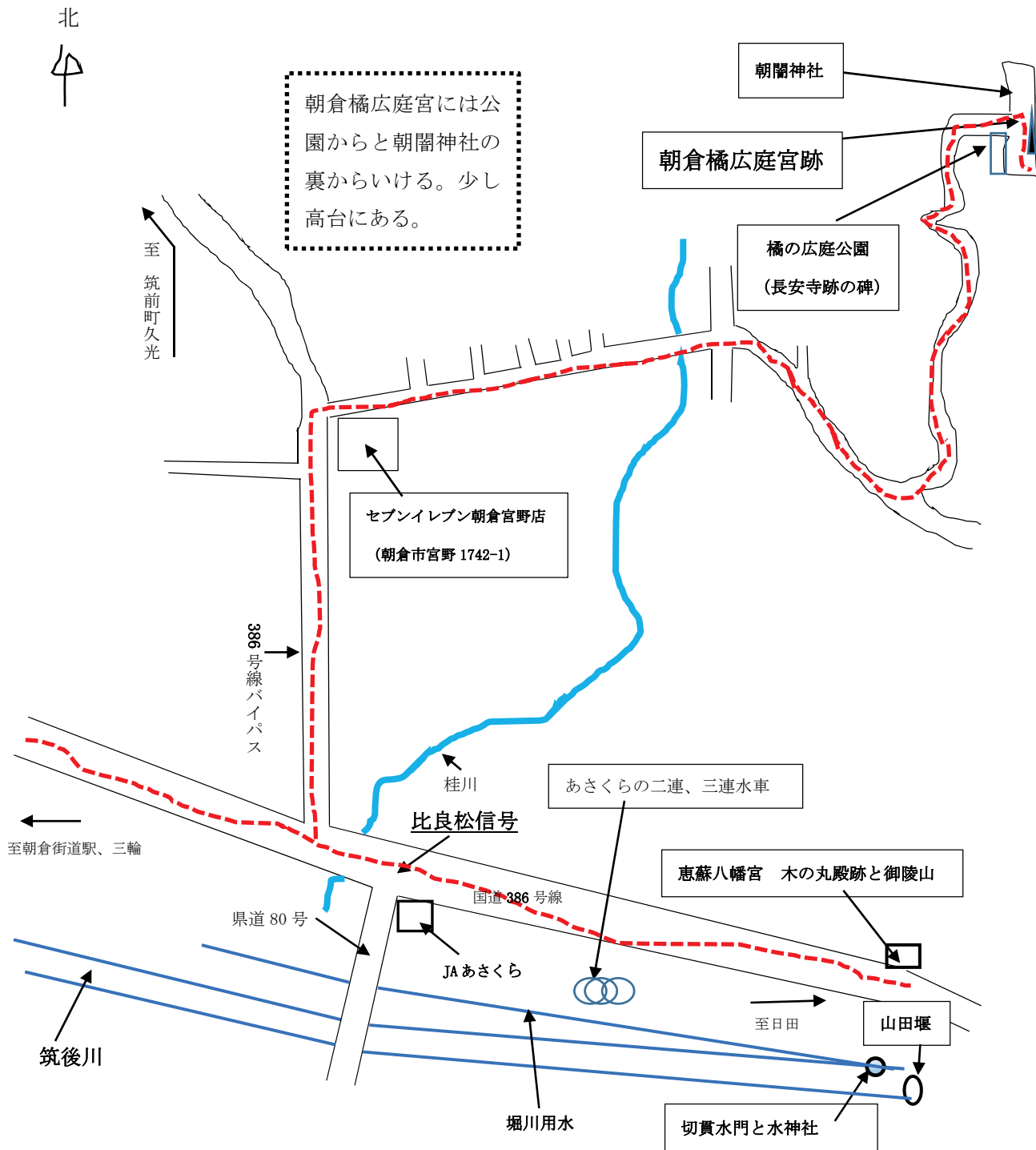
朝倉には、天皇関連の遺構の他に、山田堰が木の丸殿および惠蘇八幡宮の前（南隣）の筑後川に位置している。山田堰は江戸時代の 1663（寛文 3）年、筑後川から取水し、堀川用水を開削し、当時 150ha の新田を開発している。1722（享保 7）年に取水口を現在の位置に変更工事し、岩盤をくり抜いた切貫水門にした。1789（寛政元）年に三連水車が完成し、1790（寛政 2）年に下大庭村庄屋の古賀百工により総石張りの山田堰が完成している^{注17}。その後改良改修を加え、灌漑面積を増やしていつている。

朝倉橋広庭宮跡 (福岡県朝倉市須川 1271 付近)

長安寺跡 (福岡県朝倉市須川 1271 付近 : 旧住所 : 朝倉町大字須川字金突 1271 ~1308)

恵蘇八幡宮 (福岡県朝倉市山田 166)

木の丸殿跡 (福岡県朝倉市山田 166 付近)



朝倉橋広庭宮（あさくらのたちばなのひろにわのみや）

齊明天皇が大坂から博多港を經由して朝倉で、百済救済のために唐・新羅連合軍の戦に備えたところ。

長安寺跡（ちょうあんじあと）

とくに、参考文献[6]には朝鞍寺および朝闇寺と記録されているおり、この周辺が朝倉橋広庭宮といわれていたが、発掘調査では奈良時代の遺跡であることがわかっている。現在、朝闇神社があり、ここから南へ登っていくと、朝倉橋広庭宮跡の碑がある。

恵蘇八幡宮（えそはちうまんぐう）

恵蘇八幡宮の概要より、恵蘇八幡宮は朝倉地域の総社で、661（斉明 7）年に百済救済のため援軍派兵の際、武運長久を祈願し、宇佐神宮より応神天皇の御霊を勧請し建立されたとのことである。673（天武 2）年天武天皇の勅命により、齊明天皇・天智天皇を合祀（ごうし）されている。

木の丸殿跡（このまるでんあと）

案内板の説明より、661 年 5 月 9 日、百済救済のために朝倉橋広庭宮に遷られた齊明天皇は、病氣と長旅の疲労のため同年 7 月 24 日、御歳 68 歳で崩御された。7 日後の 8 月 1 日、皇太子中大兄皇子は、母の御遺骸を一時朝倉山上（御陵山）に御殯葬になり、御陵山の山腹（現在の八幡宮境内）に木皮のついたままの丸木の柱を立て、板を敷き、芦の籐を掛け、苫をあき、あばらなる屋に、魂を枕にし、1 日を 1 ヶ月に代えて 12 日間喪に服されたといわれ、この地は「木の丸殿」「黒木の御所」と呼ばれるようになった。

切貫水門と水神社

恵蘇八幡宮・木の丸殿跡前の筑後川は強固な岩盤があり、堀川用水を作る際に手作業でこの岩盤を貫いている。そのさい、守護神として水神を祈る水神社を水門の上に作られている。

山田堰

朝倉地域は、現在、肥沃な水田地帯であるが、江戸時代は谷間から湧き出る小川などの水を利用したわずかな水田があるだけで、湿地や原野、傾斜の激しい石が混じる砂地が広がる地域であったとのことである。1663（寛文 3）年に筑後川から水を引く堀川用水が作られ 150ha の新田を開発している。しかし、年を経るにつれて取水口に土砂が堆積し干ばつ被害を受けるようになったために、1722（安永 7）年から取水口の変更工事と改良を繰り返す、1790 年古賀百工によって、筑後川を斜めに堰き止めるという石張堰いわゆる山田堰が誕生し、堀川用水および朝倉揚水車で現在も地域農業に活躍している。



長安寺廢寺跡



橘の広庭公園



朝倉橘広庭宮



朝倉橘広庭宮周辺



朝闇神社



朝闇神社



木の丸殿跡の説明板



木の丸殿跡



御陵山（ごりょうざん）



恵蘇八幡宮



山田堰



山田堰



堀川用水および朝倉揚水（山田堰、切抜水門内部、三連水車）の説明板

三連水車

注 11) 参考文献[14]の 483 頁を参照。

注 12) 参考文献[12]の 368～370 頁および参考文献[22]216～217 頁をそれぞれ参照。

注 13) 参考文献[5]の 226～232 頁を参照のこと。

注 14) 参考文献[3]の 58～60 頁と 63～64 頁をそれぞれ参照。

注 15) 参考文献[6]の 384 頁と 399～389 頁をそれぞれ参照。

注 16) 参考文献[10]の 480～483 頁を参照。

注 17) 詳細は朝倉市のホームページ <https://city.asakura.lg.jp> を参照。

大野城跡および水城跡

3. 大野城跡および水城跡

大野城跡は、現在の福岡県糟屋郡宇美町、太宰府市および大野城市にまたがる四王寺山（大城山）に築かれている。大野城は665（天智4）年の半ばすぎに、百済の官位で第2位の達率（だちそち）を有す「憶礼福留（おくらいふくい）」と「四比福夫（しひふくふ）」とによって築城されている。この2人が築城の技師として大野城を設計し、百済から亡命してきた人と当時の日本の人々を指導して築城したとのことであった^{注18)}。この四王寺山には大野城の他、多くの土塁、石塁、城門礎石および城庫跡の礎石がある。これらはすべて唐・新羅連合の侵攻を防ぐために築かれたものである。本冊子では、百間石垣、大野城跡（尾花地区）および大野城（四王寺跡）を取り上げている。また、大水城および小水城を取り上げている。これらの遺構のうち四王寺跡と水城については貝原益軒の『筑前國讀風土記』に四王寺跡と水城^{注19)}が、井上清三の『博多郷土史事典』に水城^{注20)}についての記述がある。さらに、文化遺産調査ボランティア四王寺山勉強会『四王寺山史跡マップ』公益財団法人古都大宰府保存会、2019（令和元）年7月に詳細なマップと簡略な説明が記載されている。

大宰府には水城大堤があり東西に水城門跡があり、古代官道跡があった。太宰府教育委員会の説明板には、水城は664年に築造された土塁で、663年の白村江の敗北後、大野城や基肆城などとともに築造された防衛施設である。土塁は国分側の丘陵と住宅街になっている吉松丘陵との間の1.2km塞ぐように造られているとの説明である。

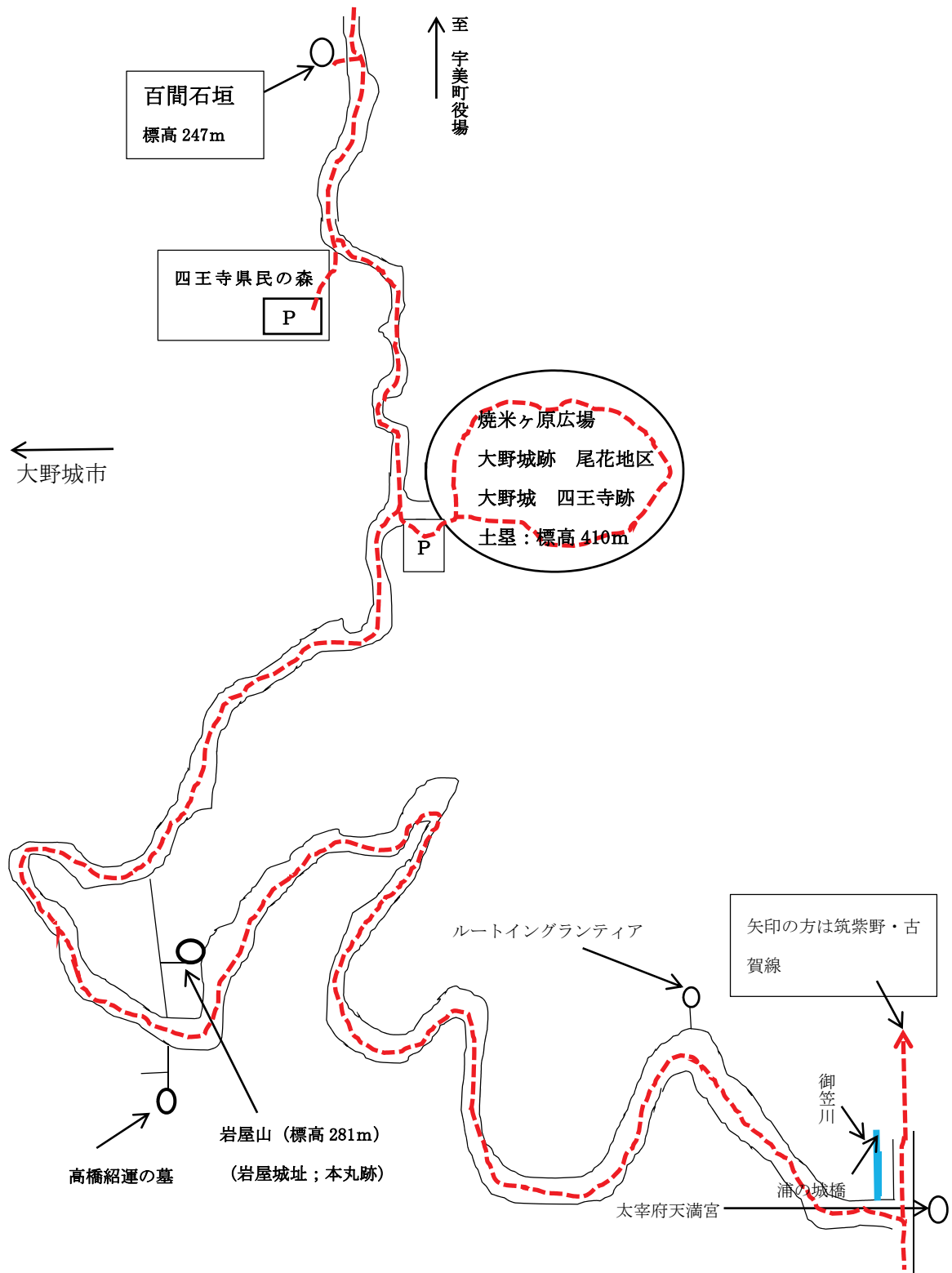
春日市教育委員会説明板より、天神山土塁（小水城）は福岡平野からの敵の侵入を防ぐための施設の中で西端に位置し自然の丘陵を利用しながら大土居側へ人工の土塁（大土居小水城）を作っているとの説明である。

注 18) 参考文献[23]の964～985頁を参照。

注 19) 参考文献[5]の178～180頁と182～184頁を参照。

注 20) 参考文献[4]の269頁を参照。

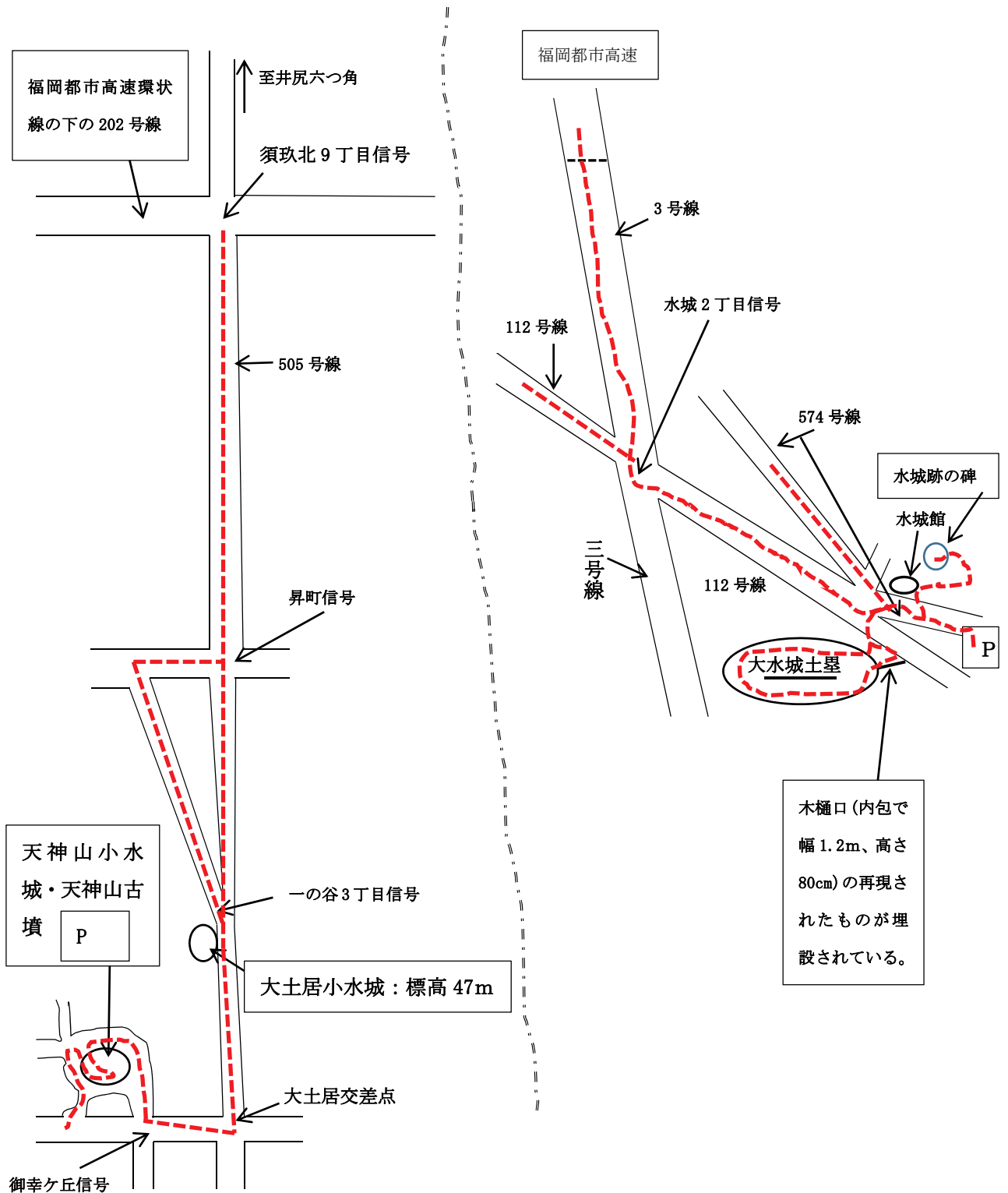
百間石垣（四王寺県民の森の住所：福岡県糟屋郡宇美町大字四王寺猫坂 207）
 焼米ヶ原広場（福岡県太宰府市）
 大野城跡 尾花地区（福岡県太宰府市）
 大野城 四王寺跡（福岡県太宰府市）



大水城（福岡県大宰府市国分2丁目17-10付近）

大土居小水城（春日市昇町8丁目11付近）

天神山小水城・天神山古墳（春日市天神山1丁目158付近）



大野城跡、持国天附付近の土塁および焼米ヶ原広場（尾花地区）

大宰府より林道を登りつめた頂上付近にある。

百間石垣

土塁が谷をわたるところは土で塁を築いているが大雨が降ると流れるので、土囊のかわりに石を積み上げて谷を塞ぎ、塁を築きあげている。大野城跡（四王寺山）で石塁が一番大きいのが百間石垣（ひゃっけんいしがき）である。百間石垣は全長約 180m で、内部まで石を積めた総石垣構造であるとのことである^{注 21)}。

岩屋城跡と高橋紹運墓

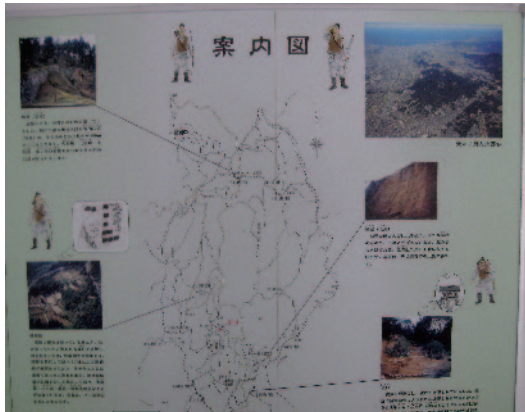
高橋紹運[たかはし じょううん：1548（天文 17）～1586（天正 14）年]は大友氏の一族吉弘鑑理（あきまさ）の弟で、名は鎮種で、剃髪して紹運となのっている。四王寺山の中腹の岩屋城主である。1586（天正 14）年岩屋城を島津氏に攻められ、一人の逃亡者も出ずに城主もろともに全員玉砕している。このことは歴史的にもまれであるとのことである。岩屋城址から南に下ったところに高橋紹運の墓がある^{注 22)}。なお、高橋紹運の長男は立花城主立花道雪の養子となり閨千代姫（ぎんちよひめ）と結婚し立花城主になるが、豊臣秀吉の九州平定で柳川に封じられ、関ヶ原合戦で一時浪人を経験し、再び復活した柳川藩初代城主の立花宗茂である。

大水城（太宰府）・小水城（春日市等）

本章の文面を参照。

注 21) 参考文献[23]の 968～969 頁を参照。

注 22) 参考文献[19]の 90 頁を参照。



四王寺県民の森にある案内板



百間石垣



百間石垣



四王寺山山頂にある大野城跡の説明板



四王寺山山頂からの眺望



大野城跡（四王寺跡）の碑



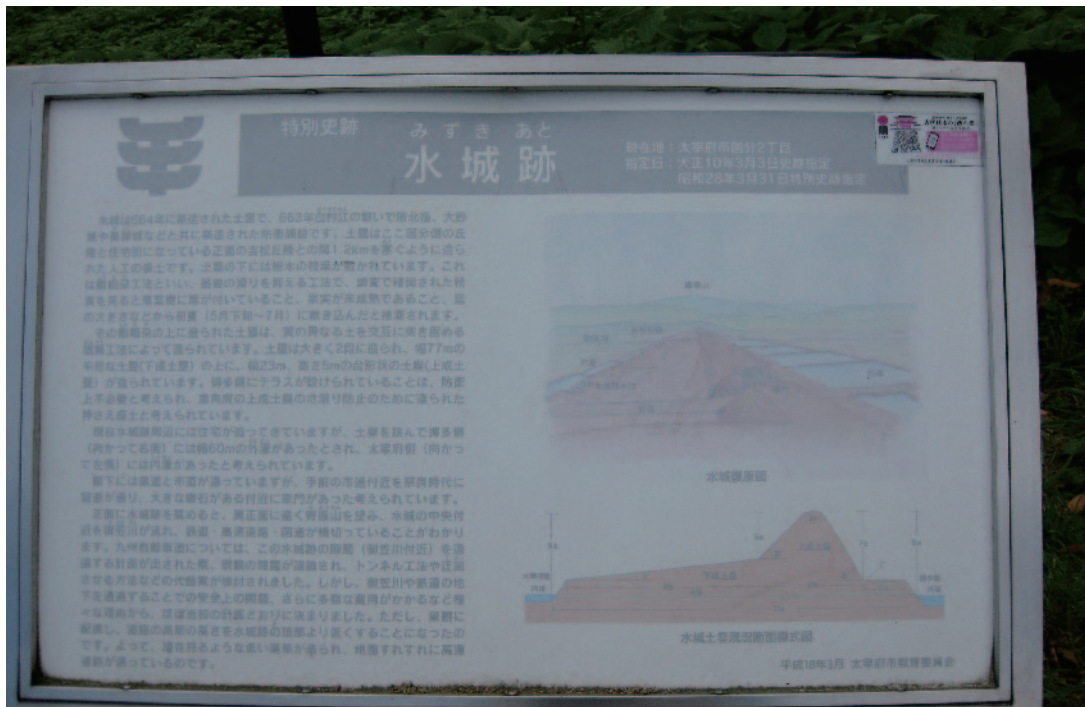
四王寺山山頂の土塁



大宰府水城跡 東門

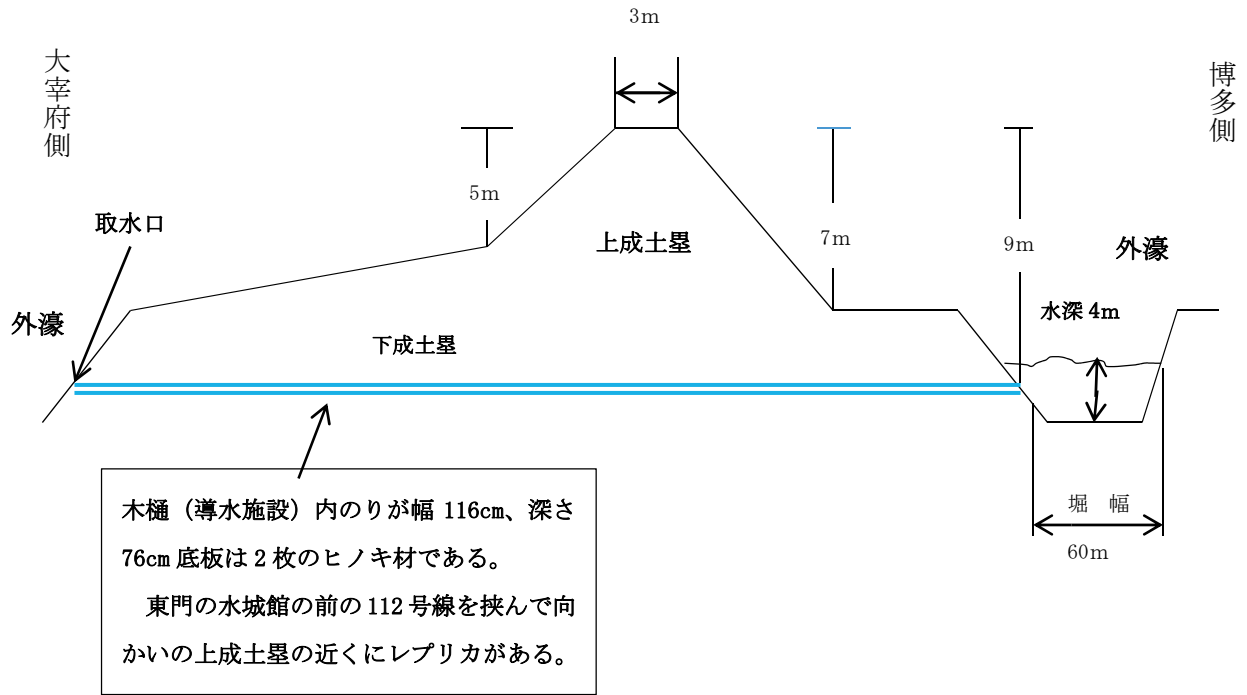


水城東門跡の説明板



水城跡の説明板

水城断面図（大宰府）



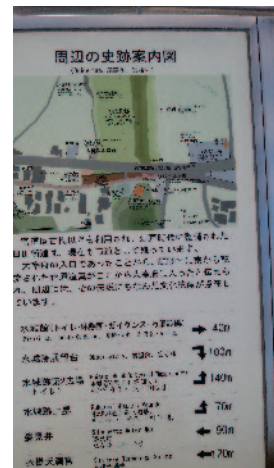
資料：<http://kofunmeguriwalking.web.fc2.com/mizukihigashimonato.html> と上記の水城説明板を参照し、加筆した。



木樋のレプリカ（西側）



木樋のレプリカ（東側）



水城・木樋の説明板



水城塚



大水城跡



大水城跡



大水城跡：この奥に木樋のレプリカがある



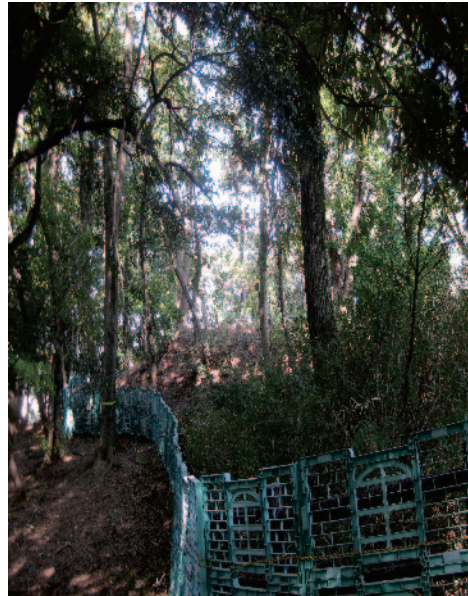
春日市大土居の小水城



春日市大土居の小水城



春日市天神山小水城跡の案内板



春日市天神山小水城跡



春日市天神山古墳の説明板



春日市天神山古墳

天智天皇と基肄城

4. 天智天皇と基肄城

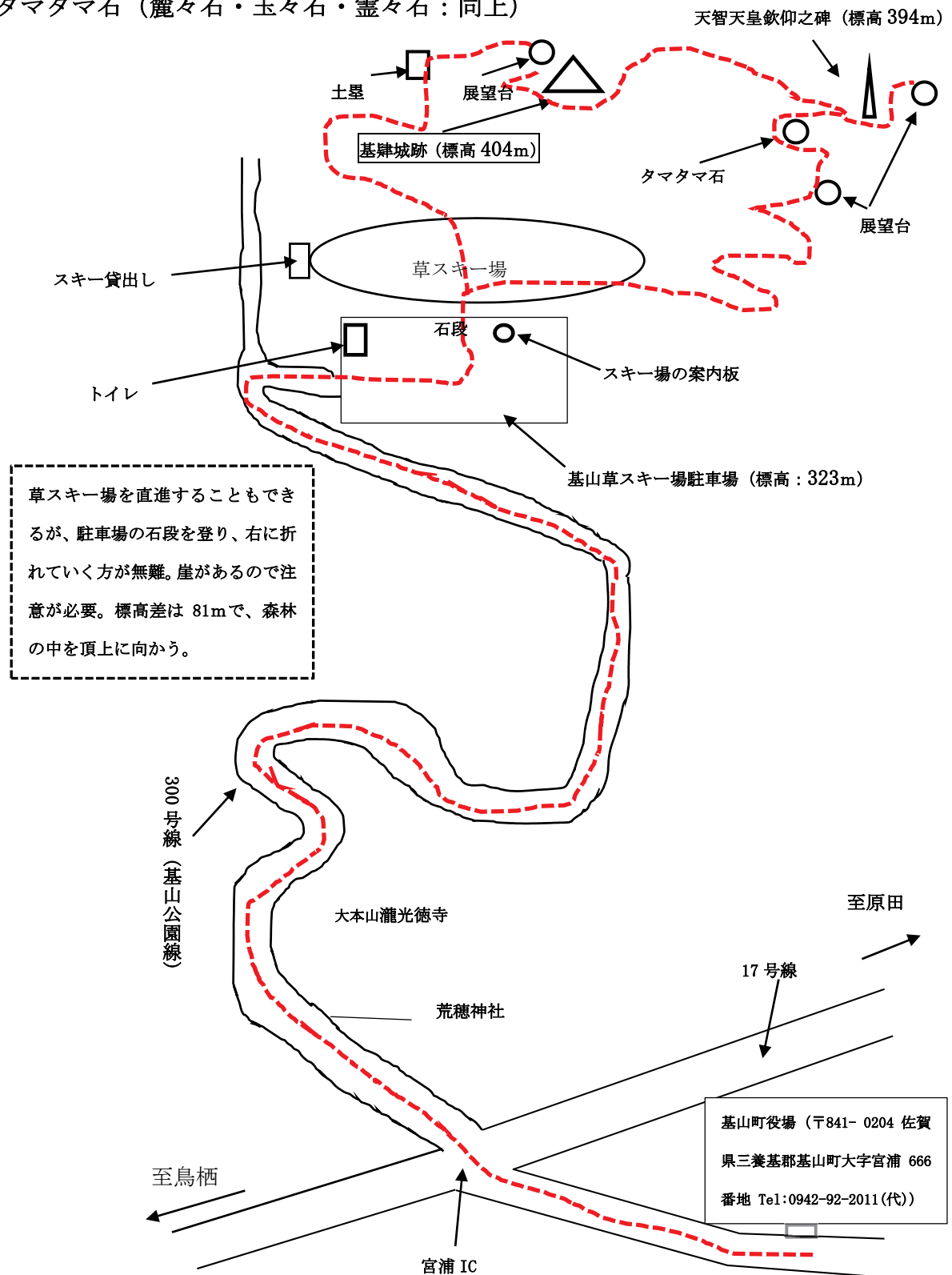
『日本書紀』の巻第二十七によれば 663（天智 2）年 9 月 24 日（甲戌）に百濟第一官位の佐平（さへい）である余自信（よじしん）、第二官位の達率（だちそち）である木素貴子（もくそくみし）・谷那晋首（こくなしんす）と百濟の民と倭の人々とともに百濟から翌日倭へ出航している。憶礼福留は兵法に詳しく 664（天智 4）年 8 月には、四比福夫とともに大野城と基肄城を築いている^{注 23)}。基肄城は基山（きざん）にあり、山麓には大宰府から南下する古代官道が通り、基肄駅（きいのうまや）で現在の福岡県と熊本県のとの分岐で、要衝である。現在、基山には草スキー場があり、その上に基肄城跡、土塁および天智天皇欽仰之碑がある。

注 23) 参考文献[13]の 28～30 頁を参照。

基肆城跡（佐賀県基山町大字小倉字北帝・坊住・車道ほか：基山町 HP より）

天智天皇欽仰之碑（同上）

タマタマ石（麓々石・玉々石・霊々石：同上）



基肆城址（きいじょうあと）

基肆城については4章の本文を参照。

天智天皇欽仰之碑（てんじてんのうきんぎょうのひ）

天智天皇については1章の本文の中大兄皇子を参照のこと。この碑は天智天皇を尊び敬って建てられている。

タマタマ石（麓々石・玉々石・霊々石）

タマタマ石は基山山頂の南端の天智天皇欽仰之碑の近くにつつしんで祀られている。この石に五十猛命（イタケルノミコト：木の神）が腰かけた岩との伝承がある。荒穂神社との関係があり、荒穂神社は当初の鎮座地は基山の山頂にあったが、戦国時代に兵火で転々とし現在の基山町宮浦に鎮座している。



基肆城跡めぐりの説明板



タマタマ石（麓々石・玉々石・霊々石）
と天智天皇欽仰之碑



天智天皇欽仰之碑



基肆城跡の碑（基山山頂）



基肆城跡の説明碑



基山山頂の土塁



天智天皇欽仰之碑付近からの博多方面を遠望

鞠智城跡と菊池神社

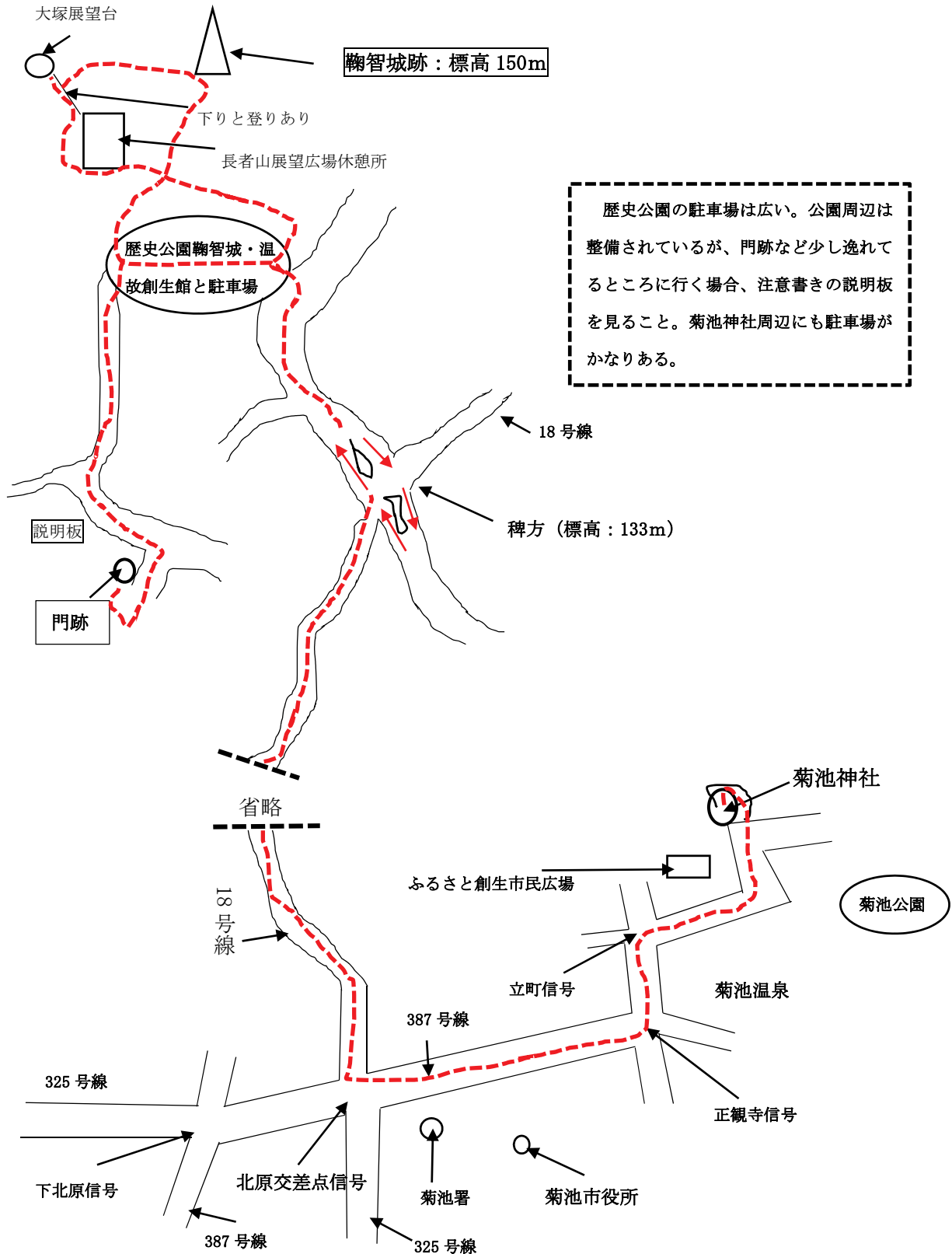
5. 鞠智城跡と菊池神社

鞠智城は、歴史公園鞠智城・温故創生館『国史跡 鞠智城』熊本県立装飾古墳館分館のパンフレットによれば、約 1,300 年前に大和朝廷が築いた山城である。当時、大和朝廷は友好国であった百済を復興するため援軍を送ったが、663 年の「白村江の戦い」で唐・新羅連合軍に敗北している。このため、事態は急変し、直接日本が戦いの場になるという危険が生じ、大宰府を守るために大野城、基肄城、金田城（対馬）などが築かれている。鞠智城は、これらの城に食糧や武器、兵士などを補給するという支援基地とのことである。城壁の周長は、自然地形の崖を含めて約 3.5km、城の面積は約 55ha で、現在は公園化して、鼓楼（八角形建物：最上階の三層目においた太鼓で場内に時間を知らせたり、見張りの役目を果たす建物）をシンボルとし、土塁、米倉（校倉造の食糧庫）、兵舎、板倉（武器の保管庫）、灰塚（360° の展望）、深迫門跡および宮野礎石などがあり、貯水池跡から百済系銅造菩薩立像が出土されている。そのことから大和朝廷と百済との関係が強いことがわかる。

菊池神社の主催神は第 12 代菊池武時公、第 13 代武重公、第 15 代武光公、第 16 代武政公以下 26 柱が配祀（はいし：主催神とそれ以外の神）されているとのことである^{注24)}。

鞠智城跡 (熊本県山鹿市菊鹿町米原 443-1 付近)

菊池神社 (熊本県菊池市隈府 1257)



鞠智城跡

5章の本文に記載。

菊池神社

菊池神社(熊本県菊池市)に第12代菊池武時などを配祀している。菊池武時(きくち たけとき：?～1333(南朝元弘3)年)は伯耆国船上山に挙兵した後醍醐天皇のもとに参じ、錦旗を賜り、1333年3月鎮西探題北条英時を筑前国博多に攻めた。少弐貞経・大友貞宗らの協力を得られず、敗死した^{注25)}。また、1336(延元元)年3月足利尊氏・少弐貞経軍と後醍醐天皇に味方する菊池一族(菊池武敏：武時の子)が戦った戦いが多々良浜の戦いで、南朝方の菊池一族が敗れている。福岡市には菊池霊社(中央区六本松)に武時の首塚、菊池神社(城南区七隈)には武時の胴塚が祀られている。

注24) 菊池観光協会ホームページ <https://kikuchikankou.ne.jp/taiken/s026.html> より引用。

注25) 参考文献[14]の396頁を参照。



歴史公園内にある八角形の復元建物の説明板



八角形の建物：この建物は鼓の音で時を知らせたり、見張りをしたりする建物



米倉の建物の説明板



米倉の建物



兵舎の説明板



兵舎



板倉の建物の説明板



板倉：高床式倉庫



大塚展望台へとつづく道



大塚展望台からの眺望



歴史公園の駐車場から深迫門跡へ向かう
分岐の案内板



深迫門跡の説明板



深迫門跡



深迫門跡



菊池神社



菊池武時公の像：第12代当主



菊池神社



菊池神社本殿

中間市の斉明天皇に関する遺構等

6. 中間市の斉明天皇に関する遺構等

斉明天皇に関する記述は西日本新聞社事業局出版部『福岡県万能地図』の中間市 105 頁に「斉明天皇行宮の御館山」が見える。これは『筑前國續風土記』の卷之十四 遠賀郡上の磐瀬の説明にあり^{注 26)}、それは『日本書紀 (四)』卷第二十六の「…磐瀬行宮 (いわせのかりみや) に居 (おわし) ます。天皇、此を改めて、名をば長津と曰 (のたま) ふ。」という記述がある^{注 27)}。この記述は日本書紀の脚注では磐瀬行宮は福岡市の三宅、長津は那珂津のことかとしているが、筑前國續風土記では朝倉への道筋である遠賀郡の磐瀬と中間村との境に御館があるとの記述がある。

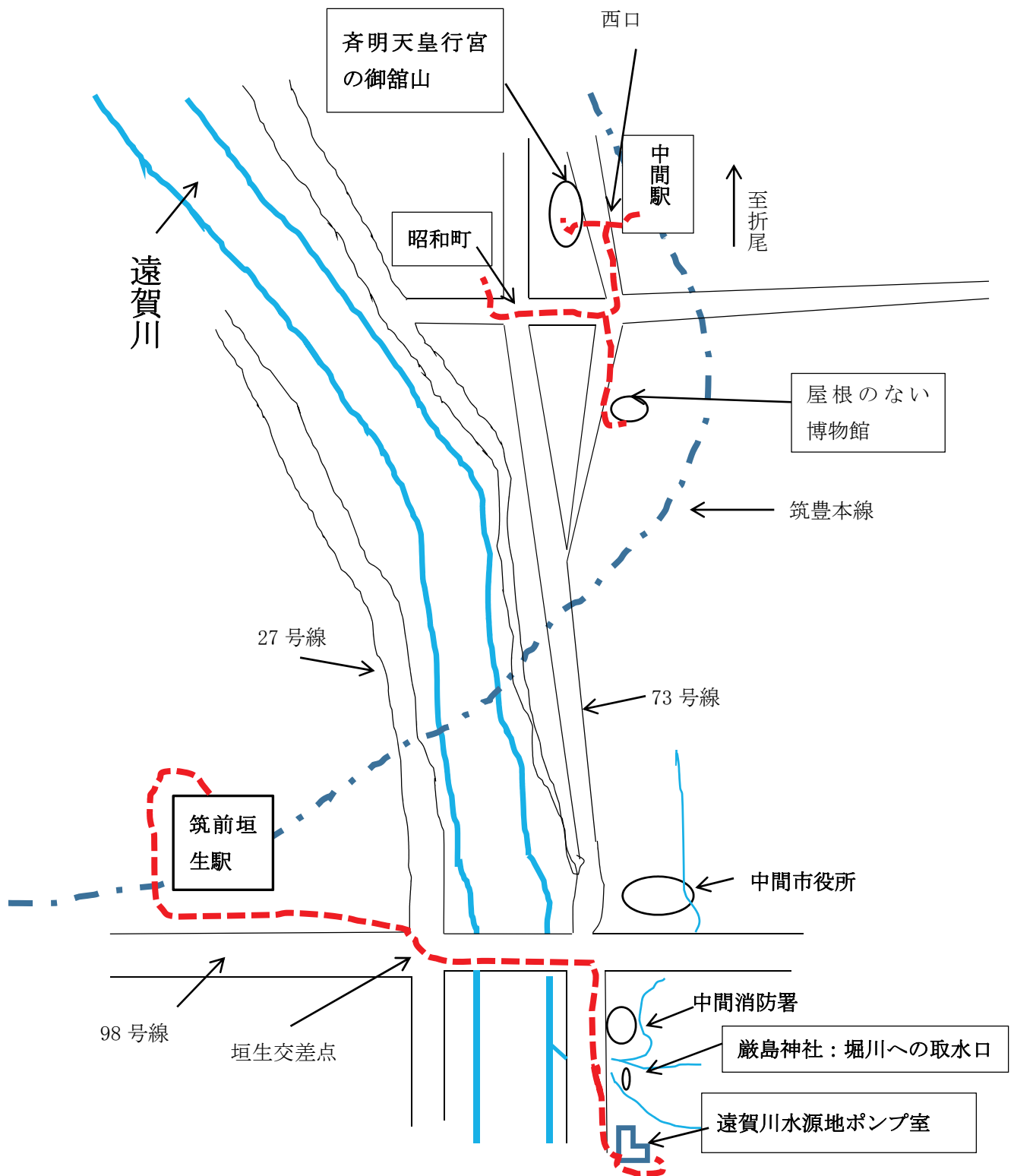
現在の斉明天皇行宮の御館山 (みたてやま) は JR 筑豊本線 (福北ゆたか線) の中間駅西口近くの小山にある。もともとは鉄道が敷設する前はこの一帯が小山であったが、鉄道が敷設されて小山が切り取られた。現在は石段を登れば畑となっている。

御館山がある長津二丁目は昭和町信号がありレトロな街並みが残っていて、炭鉱が盛んであった時代の名残となっている。JR 中間駅東口から中間市役所方面は屋根のない博物館があり、市役所からさらに南は巖島神社と堀川への取水口と遠賀川水源地ポンプ (明治日本の産業革命遺産) がある。

注 26) 参考文献[5]の 308 頁を参照。

注 27) 参考文献[13]の 368 頁を参照。

齐明天皇行宮の御館山（福岡県中間市長津 2-16-26 付近）



齊明天皇行宮の御館山

6章の本文を参照のこと。ただ、参考文献[8]の557～558頁に御館の説明があるので、それを参照のこと。

中間市昭和町

昭和町について、1931（昭和6）年と1938（昭和13）年の昭和通りの写真が参考文献[9]の5～6頁に掲載されている。

巖島神社と堀川への取水口

巖島神社と堀川取水口（中間唐戸水門）は中間市消防署近くに73号線の笹尾川橋信号のところにある。堀川はこの取水口から長津を通り、折尾駅前から洞海湾へと注いでいる運河である。堀川運河は江戸時代、黒田藩の家臣栗山大善（利明：としあきら）によって開削された人工河川であり、遠賀川から舟を通すことや洪水を防ぐためのものであった。鉄道が開通するまでは、筑豊炭田から若松港への石炭輸送に重要な役割を果たしてきた^{注28)}。近代化産業遺産でもある。

遠賀川水源地ポンプ室（明治日本の産業革命遺産）

中間市観光案内ホームページ <http://www.nakamap.jp/sekaiisan/>より、遠賀川水源地ポンプ室は官営八幡製鉄所（現日本製鉄八幡製鉄所）のポンプ室である。冷却用水などを確保するために遠賀川東岸に水源地を設け、パイプラインを経由して製鉄所へ送水するシステムを構築している。明治に建設された煉瓦建造物で、赤煉瓦をイギリス積み方式で積み上げられている。現在も稼働している。

注28) 参考文献[9]の254～451頁を参照。



中間市 JR 福北ゆたか線の中間駅西口
の向かいの小高い丘



斉明天皇行宮の御館山



斉明天皇行宮の御館山：この向こうは
野菜畑



屋根のない博物館



中間市 昭和の町（長津2丁目）



中間市 昭和の町（長津2丁目）



巖島神社と堀川の中間唐戸水門



堀川の中間唐戸水門



遠賀川水源地ポンプ（明治日本の
産業革命遺産）



遠賀川水源地ポンプ場の裏
（明治日本の産業革命遺産）

筑紫の磐井

7. 筑紫の磐井

磐井[いわい：?～528（継体 22）年]は『日本書紀』には「筑紫の磐井」^{注 29)}、『古事記』には筑紫君石井（つくしのきみいわみ）のなかで、継体記に筑紫国造（つくしのくにのみやつこ）の「磐井」^{注 30)}が見られる。本冊子では以下「磐井」とする。磐井は筑紫国の古代豪族で大陸との交流を持っていた。当時の交通は海路で、船を造り、また船を操る者が、権力を有していた。磐井は筑後川、有明海を通じて大海を渡り、大陸と行き来しており、百済と深い関係を持っていた大和朝廷とは異なり、新羅との独自の交流ルートを持っていた。このことが、大和朝廷から磐井の謀反をはかったとして、物部鹿鹿火[もののべのあらかび：大伴金村・巨勢男人とともに継体天皇擁立に加わり、即位後、大連（おおむらじ天皇の補佐として執政）]によって筑紫三井郡の交戦で敗れている。磐井の子の筑紫君葛子（つくしのきみくずこ）は父の罪に連なって死刑となるのを恐れて、糟屋屯倉を朝廷に献じている。その後数年の間に筑紫の穂波屯倉、豊国や火の国などにも多くの屯倉ができた。これらは九州の政治と大陸との軍事外交をつかさどらせるためであったとされている。

なお、磐井一族は斉明天皇崩御との関連性も指摘されている記述もあるが定かではない。

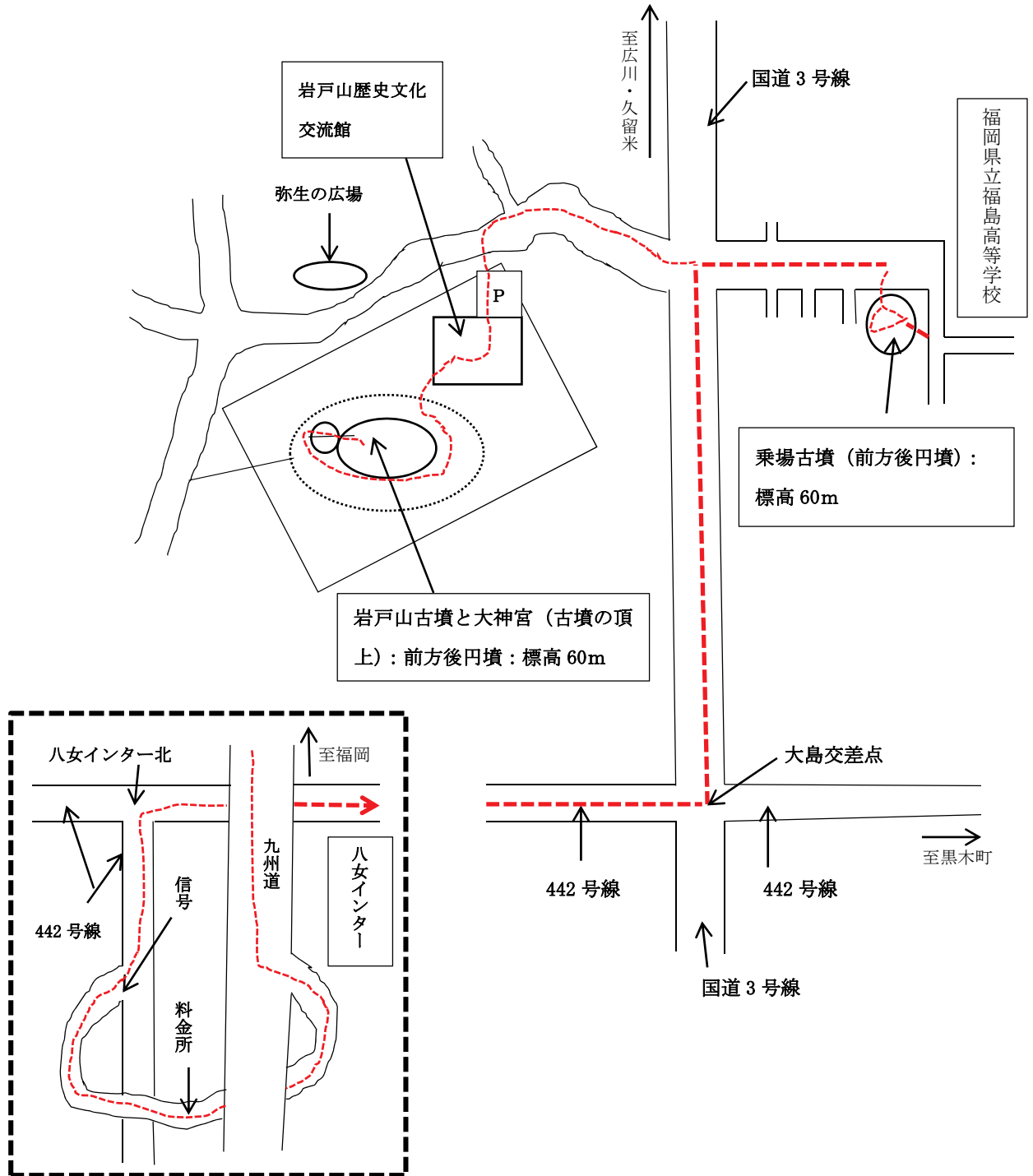
注 29) 参考文献[11]の 190 頁を参照。

注 30) 参考文献[18]の 172 頁と 174 頁とを参照。

筑紫の磐井（岩戸山歴史文化交流館：福岡県八女市吉田 1562-1）

岩戸山古墳と「別区」（同上付近）

乗場古墳（福岡県八女市吉田 1581 付近）



筑紫の磐井

7章の本文を参照。

岩戸山古墳と「別区」

岩戸山古墳は、現在福岡県八女市にある前方後円墳で、九州地方北部においては最大規模の古墳である。被葬者は筑紫君磐井といわれている。古墳の丘の上には「大神宮」が鎮座している。墳丘・周堤・別区からは「石人石馬」が出土されている。筑紫君磐井については、7章の本文の『日本書紀』および『古事記』以外に、『筑後国風土記 逸文』に記載されている^{注31)}^{注32)}。

乗場古墳（のりばこふん）

乗場古墳は、八女市のホームページ <https://city.yame.fukuoka.jp> によれば、墳丘約70mの前方後円墳で6世紀中頃の装飾古墳である。後円部の南側に複室構造の横穴式石室入り口がある。すぐ近くに福岡県立福島高等学校がある。

注31) 参考文献[1]の507～508頁を参照。

注32) 参考文献[20]の522～524頁に岩戸山古墳と別区の図が記載されている。埋蔵品等の記述がある。



岩戸山歴史文化交流館



岩戸山歴史文化交流館にある石人石馬



岩戸山古墳「別区」の説明板



岩戸山古墳の上にある大神宮舊跡



岩戸山古墳（全景を撮影できない）



岩戸山古墳前方部



乗場古墳



乗場古墳



乗場古墳説明板

8. おわりに

本冊子の表題は、筑紫国（福岡県）周辺の古代城跡からみる歴史― 「まち」おこしとしての財産を活かすため ―としている。筑紫国（つくしのくに）は日本の律令制に基づいて設置された地方行政区分で豊前国を除いた筑前国と筑後国の郡であり、おおよそ現在の福岡県にあたる。筑紫国周辺には古代城跡があり、この城跡は白村江の戦い後の大和朝廷による唐・新羅連合軍に対する防衛のために百済からの多くの亡命者が渡来し、朝鮮式山城の指導とともに、仏教などの渡来文化をもたらしている。もう一つの唐・新羅連合軍の朝鮮半島からの影響は、統一新羅が成立し、高句麗（高麗）からの亡命を受け入れ、現在の埼玉県高麗郡に高麗人の遺民が存在し、かれらが日本に伝えた渡来文化がある。

また、鎌倉時代、弘安の役のとき、諸国の御家人たちが北部九州の沿岸一帯に元寇防塁（石築地）を築造し、元軍を防御している。戦国時代には、現在の福岡県には約 400 ヶ所の城跡（一説には、古代・中世の城跡は約 1,000 ヶ所）が存在しているといわれている。これらの城跡には石垣が残っているのもあれば、残っていないものもある。福岡市近郊の石築地や山城の石垣は福岡城などの石垣に用いられている。福岡における戦国時代の城主や家臣は江戸時代になると、これらの人々は商業や農業に従事し、明治以降、経営者や農業指導者などとして活躍している。福岡城の石垣は名島城の石垣、石築地および古墳石室（西油山の鬼塚：僧坊跡）などの石材を利用したといわれている。戦国時代の立花城と同盟関係にあった荒平城は肥前の龍造寺氏に滅ぼされたが、その家臣は明治以降呉服店、油屋、燃料屋等を通じて百貨店経営者（中牟田家）、農業指導者の一人である伊佐佐八郎など多くの人材を輩出している。また、福岡藩は博多織や高取焼など、久留米藩は久留米緋を振興してきた。これらのことは現在の福岡県地方の伝統文化や地域経済の発展になんらかの影響を与えているものと思われる。

一般的に、戦いを含めた人の活動は戦国時代以降が活発であるが、周知のように、安土桃山時代から江戸時代まで様々な文化が発展しており、それが現在も続いている。本冊子は、現在の福岡県周辺の遺構から、それらの文化は戦国以前の倭国時代の渡来文化を含む現在の地域の伝統文化が累積した結果であると考えられる。

われわれが地域の「まち」おこしを考える場合、どの時点からの影響を捉えるかによって、「まち」おこしの施策が異なる。よって、本冊子では、多くの遺構が存在する倭国時代からの文化からどのように「まち」おこしを考えるかの手がかりを提供するものである。

参考文献

- [1] 秋本吉郎校注『日本古典文学体系2 風土記』岩波書店, 1960年7月.
- [2] 青柳種信著／広渡正利・福岡古文書を詠む会編校訂『筑前國續風土記拾遺 上巻』文献出版, 1993年4月.
- [3] 青柳種信著／広渡正利・福岡古文書を詠む会編校訂『筑前國續風土記拾遺 中巻』文献出版, 1993年5月.
- [4] 井上清三『博多郷土史事典』葦書房, 1986年11月.
- [5] 貝原益軒編／伊東尾四郎校訂『増補 筑前國續風土記』文献出版, 2001年6月.
- [6] 加藤一純・鷹取周成共編／川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『筑前國續風土記付録 上巻』文献出版, 1977年12月.
- [7] 三田誠広『白村江の戦い 天智天皇の野望』2017年7月.
- [8] 中間市史編纂委員会『中間市史 (上巻)』中間市, 1978年11月.
- [9] 中間市史編纂委員会『中間市史 (中巻)』中間市, 1992年3月.
- [10] 奥村玉蘭著／田坂大蔵・春日古文書を読む会校訂『筑前名所図会』文献出版, 1985年12月.
- [11] 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀 (三)』岩波文庫, 2000年1月.
- [12] 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀 (四)』岩波文庫, 1999年10月.
- [13] 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀 (五)』岩波文庫, 1999年10月.
- [14] 三省堂編集所編『コンサイス 日本人名事典』株式会社三省堂, 1999年10月.
- [15] 高橋通『日本書紀の証言から 倭国通史』原書房, 2015年4月.
- [16] 遠山美都男『白村江 古代東アジア大戦の謎』講談社現代新書, 1997年10月.
- [17] 次田真幸著『古事記 (中)』講談社学術文庫, 2008年12月.
- [18] 次田真幸著『古事記 (下)』講談社学術文庫, 2007年4月.
- [19] 内山敏典『福岡都市圏歴史散策マップ記』九州産業大学産学連携室, 2009年5月.
- [20] 植垣節也校注・訳者『日本古典文学全集 風土記』1998年6月.
- [21] 宇治谷孟『全現代語訳 日本書紀 (上)』講談社学術文庫, 2009年1月.
- [22] 宇治谷孟『全現代語訳 日本書紀 (下)』講談社学術文庫, 2009年1月.
- [23] 宇美町誌編纂委員会『宇美町誌』宇美町役場, 1975年10月.

[著者紹介] 内山 敏典 (うちやま としのり)

現在、九州産業大学経済学部教授、九州産業大学大学院経済・ビジネス研究科教授

専攻：統計学，計量経済学 担当科目：統計学，計量経済学およびゼミナール科目（学部）

経済・経営統計，経済学演習，統計・計量研究，経済課題研究，統計・計量セミナー（大学院経済・ビジネス研究科博士前期課程），柿右衛門特論（大学院芸術研究科博士前期課程造形表現専攻），全研究科共通科目（基盤能力特論：研究倫理：全研究科博士前期課程）

計量経済学特別研究，計量経済学論文演習（大学院経済・ビジネス研究科博士後期課程）

経済学修士

博士（農学）

主要著書

『アンケート調査に基づく専門教育科目の授業効果分析』（共著）九州大学出版会，1989年.

『消費需要の計量的分析—食肉消費を事例として—』（単著）晃洋書房，1992年.

『間接税改革の国際比較』（共著）九州大学出版会，1993年.

『統計解析技法』（単著）晃洋書房，1993年. 『消費構造の変容とその統計的分析』（単著）晃洋書房，1995年.

『余暇関連財需要の計量的分析』（単著）晃洋書房，1998年.

『増補 統計解析技法』（単著）晃洋書房，1998年.

『計量分析のための統計解析技法』（単著）晃洋書房，2002年.

『早良逍遥マップ記—歩いて歴史を訪ね、未来に繋ぐ—』（単著）城島印刷，2003年.

『看護統計テクニック—基本からパス分析まで—』（監修）医歯薬出版，2003年.

『続 早良逍遥マップ記—鉄道跡を歩いて、未来に繋ぐ—』（単著）城島印刷，2005年.

『トピックス統計解析技法—電卓，Excel および VBA における計算法—』（単著）晃洋書房，2006年.

『基本計量経済学』（共著）勁草書房，2006年.

『経済・心理・医療・看護等の教育のためのベーシック統計解析技法—電卓，Excel および VBA における計算法—』（単著）晃洋書房，2008年.

『福岡都市圏歴史散策マップ記』（単著）九州産業大学産学連携室，2009年.

『有田・伊万里および福岡地域における消費者の意識調査分析—新しい陶磁器需要創造および生産構造をめざして—』（共著）九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター，2009年.

『福岡（筑前）およびその関連地域の歴史散策マップ記—とくに高取焼および元寇を例とした「まちおこし」のための文化・歴史について—』（単著）九州産業大学産学連携室，2011年.

『柿右衛門様式学—“やきもの”の技法と歴史及び美—』（共著）九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター，2011年.

『統計解析の基礎—データ解析の基本と実践—』（単著）晃洋書房，2015年.

『旧三瀬街道とその周辺逍遥マップ記—伊能忠敬一行の測量から200年を経過して—』

『唐津・多久・大町地域周辺散策記—歴史的遺産を通じて、現在・過去・未来を考える—』（単著）九州産業大学，2017年.

『経済・経営・心理・医療・看護等指導者のためのアンケート調査データ解析の技法—ACCESS・EXCEL ソフト、F-BASIC・十進 BASIC・VBA プログラムそれぞれの利用方法—』（単著）MyISBN - デザインエッグ社，2018.

『路地から見る歴史と文化—「まち」おこしての財産を活かすため—』（単著）九州産業大学，2018年.

など、著書および専門論文・COE・科研費論文多数.

筑紫国（福岡県）周辺の古代城跡からみる歴史
— 「まち」おこしとしての財産を活かすため —

2020年1月31日 初版発行

著者 内山 敏典

発行 九州産業大学

〒813-8503 福岡市東区松香台 2 丁目 3 番 1 号

TEL 092 (673) 5215 (研究室)

印刷・製本 よしみ工産株式会社

〒804-0094 福岡県北九州市戸畑区天神 1 丁目 13 番 5 号

TEL 093 (882) 1661 Fax 093 (881) 8467

非売品

©Toshinori Uchiyama